

ー債務と女性の貧困化ー

○石黒由美子 (東京都立大学)

目的 欧米では80年代から統計的に女性の貧困化が明確となり、統計指標としてジェンダーの視点が重要視されるようになった。債務研究においてもフェミニズムの視点が当てられるようになってきた。何故なら、債務の「返済困難」は、あくまで個人の管理の失敗と社会は見做すが、管理の失敗者として烙印(ステイグマ)を押され、避難されるのは圧倒的に女性であるからである。債務世帯内で男性は自分の家計配分はしっかり確保し、世帯内での女性の貧困化現象も問題とされるようになった。世帯内の配分差までは今回の調査では明らかにできなかったが、債務世帯の生活水準・家計構造の特徴を男女別で示し、その特徴を明かにする。

方法 第1報で報告したK法律事務所の調査対象世帯を債務者の性別に〈男〉、〈女〉、〈男+女〉に分け再集計し、債務内容、生活保護倍率階層分布、家計構造の特徴を調べる。〈男+女〉世帯に関しては世帯内の家計配分が問題になるが、今回の調査では世帯内の詳細にまで踏み込めなかったため、債務者が〈女〉である世帯の特徴を明かにする。

結果 女性の債務者の生活水準は約7割が貧困層となっており、他に比べて圧倒的に低水準となっている。また他の性別類型より返済の意志が強く、結果的に借入金返済後の生活水準も大きく転落する。男性の債務者は返済後の生活水準の移動が大きくはない。また女性の債務者は、消費者金融からの借り入れが目立ち、銀行、職場からの借り入れが少ない。家計構造はその他、こづかいなどの配分が他より少なく、借入金返済の割合は他より多くなっている。